

府中のビオトープを見つめて

第9回 府中エリアから

日本はすでに高齢化社会に突入している。文化的に成熟した社会になりつつある一方、生産性は落ちて経済規模は縮小を余儀なくされる。知恵はあるが金はないという世の中である。都市社会は右肩上がりの経済成長を前提としていたが、これからはできるだけ無駄を省き、また効率が求められる。環境対策に置き換えてみれば、力技で自然を制圧するのではなく、いかにうまく自然と折り合いをつけるかということである。だから、環境負荷の低い街づくりが求められる。生物多様性の保全もその大きな目標の一つである。

いま、東京都の自治体では生物多様性地域戦略づくりが盛んに行われている。戦略という言葉の響きは物々しいが、ようは生き物とともに暮らす街づくり計画のことである。身近の生き物にまなざしを向けて、その大切さを理解してもらおう。同じような取り組みは企業をはじめ民間レベルでも始まっている。府中事業所のビオトープが産声を上げたのも、この地域におけるそうした発信拠点になろうという思いが少なからずあるからだろう。生き物の住処となるビオトープづくりも重要であるが、そればかりが目的ではない。

多摩川と野川に挟まれた府中エリアは東京でも緑の濃い地域である。浅間山や矢川緑地などはまさに生物多様性の重要拠点である。貴重な動植物の生息地でもある。野川や玉川上水は、そのような拠点と都心の緑地、たとえば皇居や明治神宮の森を結ぶネットワークの動脈機能を担っている。都心と府中エリアは遠く離れているようでも、こうした緑の回廊を通じて生き物たちの交流がある。

生物多様性地域戦略はなにも都心の自治体だけがつくればよいというものではない。生き物の供給源となる府中エリアのような地域が戦略を持つ意義は高いと思う。それにはどうしても自治体主導で動いてもらわなければならない。たとえば府中市さん。貴重な緑の財産を守り活かすような地域戦略を策定し、街づくり計画の中で環境施策を推進してはどうかだろう。その枠組みがあれば、市民も企業も取り組みに積極的に参画できるに違いない。

それにはやはり人材が必要である。活動を牽引するリーダーと、生物学や生態学、都市計画などの専門家、そして何よりも地域の自然を愛する人たちが力を合わせて、この地域の自然と生き物を守り育てていただきたい。もちろん私もその仲間の一人であると思っている。

9回にわたり連載をしてきたこのエッセイも今回で最終回となる。残暑の季節に始めて早いもので年の暮れとなった。私は寒いのが苦手だし、もはや大好きな虫も姿を消した。だから幕引きにはお誂え向きの季節である。

この連載のなかで一番いいかったことは、生き物ひとつ一つに向けたまなざしを持ってほしいということである。散歩に出たときでもいい。あなたが今見ている風景がなぜそこにあるのか、鳥や花はなぜそこにいるのか、思いをめぐらしてみる。そのためのヒントを書いてきたつもりである。

=====

執筆者紹介：新里達也

1級ビオトープ計画管理士。農学博士。専門は保全生態学および昆虫分類学。著書に野生生物保全技術（共編）や日本産カミキリムシ（共編）などがある。（株）環境指標生物代表取締役。東京都国分寺市在住。